

# オアシス30号



放射線科技師  
櫻井 厚也

## 最新機器導入にあたり

今年の秋は一気に過ぎてしまい、冬の寒さが到来しております。当病院ご利用の患者様は是非気候の変動に気を付けて頂きたいと思います。今回患者さん皆様には、レントゲン室に11月より全く新しい、最先端技術を駆使したデジタル透視装置が導入されたことをご報告したいと思います。

この装置で日常行われる検査として、バリウムなどを使った胃や大腸のレントゲンがあります。これまでの装置と比較してみると、撮影速度が非常に速く、タイミングを逃すこともなくなりました。透視時は微細な影をはっきりと写し出すことが可能となり、撮影した画像は瞬時にコンピュータ画面に映し出されます。体に受ける被曝線量は従来の数分の1と少ないため、体にやさしい装置です。また、造影剤を用いての血管造影装置も完備し、より質の高い画像診断

が可能となりました。

今回この装置の質の高い透視・診断能力により、肝臓の腫瘍などに対しては血管を利用した治療も可能となりました。これは血液が多く流れている肝腫瘍に抗腫瘍薬剤を流したり、腫瘍を育てている栄養血管を意図的に詰まらせて腫瘍部分の血流を遮断する塞栓術（TAE）が行えるからです。つまり腫瘍を兵糧攻めにするのです。今後の運用次第では多くの治療が考えられると思います。

またデジタル化されたことにより、多くの画像データをフィルムにすることなく保存することができ、将来的には二年前の写真と今回撮った写真をパソコンの画面で比較する事ができることなども考えられます。さらに電話回線等で画像を他の医療機関に送ることで、専門医と治療方針を決めるということも可能となるでしょう。

それにともない現像機もドライイメージャーという機械の導入を行いましたので、現像スピードも非常に速くなり、少しでもお待たせする時間の軽減に役立つよう努力しております。

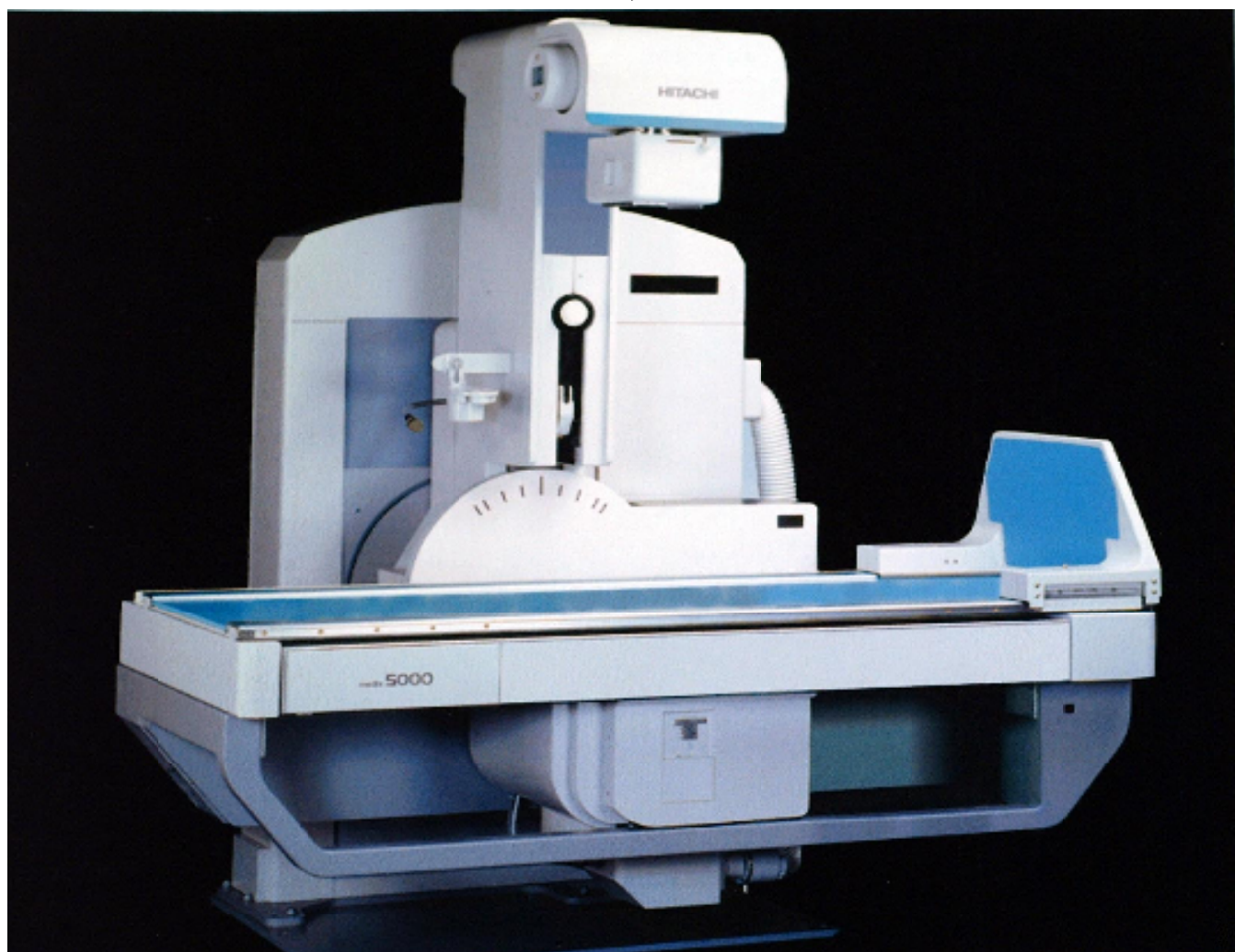
医療業界におけるIT化の欠点として、医師や看護師がコンピュータの画面ばかりを見て、患者さんと向き合わないという問題がどこの病院でも起きています。

私たち須藤病院では、医師をはじめ看護師、技術者、受付にいたる全職員が、常に患者様の目を見て、実際に手を触れ診療を進めていきます。またIT化の波に遅れることなく、設備化を進めていくことを考えております。世界の変化が本当に著しい時代です。今後とも皆様のためになる設備等を考えて、運営して行きたいと思っております。

最後に、残るは装置を扱う技師の腕のみとなりますが、私たち画像診断部のスタッフも学会等には積極的に参加し、常に最新の医療技術を皆様に提供できるように考えておりますので、今後ともよろしくお願い致します。



操作室の様子



今回導入されたX線透視台

# 松井よねさんの 思い出

病院長 須藤 英仁

松井よねさんは富岡市相野田で長く郵便局長をされていた、故松井愛一氏の奥様です。愛一氏が昭和62年脳梗塞で倒れられ、私どもの病院に入院された時から交流が始まりました。いつもにこやかで、心を平らにされ、“おかげ様で……。”という感謝の心をいつも話されておりました。

よね様は80歳の時に自叙伝を表され、私はその本を読ませていただきました。誕生時から、80歳までの間に関係のあった方々や、親戚の方々のことがつぶさに書かれておりましたが、否定的なことや世間を悪く言うことなど全く無く、本当に一人一人のことを前向きに、しっかりと人格を認められていることに心が洗われる思いでした。

よね様ご自身、夫愛一氏が

戦後シベリアに抑留されている中、肺結核にかかり、現在の西群馬病院に入院され、そのような時でも五人のお子様を支え続けながら人生の絶望の時代も生きておりました。そんな中、あのような前向きな姿勢を得られたことは、我々も本当に学ぶべきものがあると思います。晩年私が関係しておりますジョリエやなせに入所しておられましたが、たまたま私がジョリエやなせにおじゃましている時に、突如心臓発作を起こされ、91歳の天寿をまっとうされたのでした。本当に苦しむことなく、すっと旅立たれ、まさに“よく生き、よく死に”という言葉がピッタリでした。その後、松井様の御家族から当病院へ御奉仕を頂き、今回のレントゲン装置導入の一部に使わせて頂きました。そんなすばらしい方の命が入っているレントゲン装置であると肝に銘じ、私どもは患者さんのために使用していきたいと思っております。